

空が高く、空気が澄み渡り待望の寒さ到来ですね。カシミヤがメインのUTOにとっては待ちに待った寒さ。ニットが実力を発揮するシーズンになりました。

夏場は7時過ぎまで明るかったのに、陽も短くなり帰宅時間はもう真っ暗ですね。北国からは雪の便りが届き、東京でも木々が色づき始め、木枯らし一号が吹きまじった。ということは、UTOのカシミヤが活躍する季節。

コートの下は、やっぱり軽くて柔らかく暖かいカシミヤセーターが一番ですね。カシミヤフェアは受注会一辺倒から、『注文も出来ずという現物フェア』に変わってきました。

「ゴルフ雑誌『ワグネル』」一月号で当社のメンズ商品が紹介されました。機会があれば是非ご覧ください。

【O.E.M.別注のニット】

ニット作りの一番のハードルはロットですね。独立起業して一番苦しんだのが工場さんに要求される生産ロットの多さでした。展示会で500枚なら注文をいただける自信があるけど当時の最低ロットは1型100枚。作れば残るのはみえみえ。そんな厳しい選択の中で、作らなければメーカーとして成立しないのでとにかく作って残りを売ろうと頑張りましたが、結果は在庫の山で窮地に追い込まれた苦しい経験があります。

自ら機械を持ち供給する側になった今、その辛い経験を元に最小の生産ロットで供給することを目指し12枚から注文を受けるところになりました。今ではこの生産ロットの少なさがお店にもアパレルにも評価され、UTOの『売り』になりました。もちろん全商品日本国内生産です。

ニットの自社商品にトライしてみませんか？

【条件・最低ロットは1型12枚より】

一型、12枚
色数、3色まで、(3色×4枚×12枚)

参考編地やサンプルを当社で提示します。デザイン画、写真或いは現品を見せて頂ければ、ニット特有の指示書などは弊社でお手伝い致します。

カシミヤ100%

ヘンリーネックポケット付き

No.1007-1001 ¥48,000.+TAX

ちょっと厚手の7ゲージのダシングルハイネック。ヘンリーネックなのでとっても着やすくとても重宝です。両胸のポケットが遊び心を演出しています。

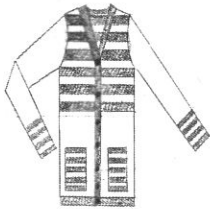


カシミヤ100%

ボーダーロングカーデガン

No.1007-2001 ¥84,000.+TAX

着丈たっぷりのコートを思わせる豪華なカーデガン。裏編みに太目のボーダーと大き目の貼り付けポケットの飽きの来ないデザインです。

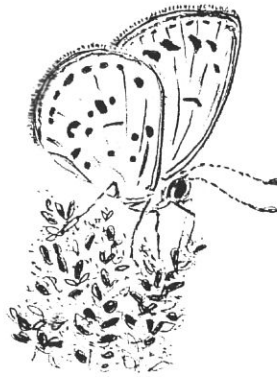
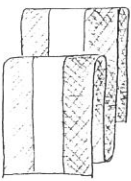


カシミ100%

インターシャ縦縞ショール

No.3007-3004 18,000.+TAX

肌触りはふんわりの天使シリーズ、3配色のインターシャ柄が好評。貴方の好きな色で配色にチャレンジしてください。



サツマジミ

「南青山界限」 UTOはこんな街から発信しています

幻のみゆき通り

みゆき通りは、御幸通り？ 行幸通り？

ここ青山・表参道界隈には青山通りをはじめ名前のついた通りがいくつもあります。表参道通り、骨董通り、キラー通り、キャットストリートやみゆき通りという名の通りもあります。今回はこのみゆき通りのことです。

みゆき通りは原宿から表参道を登ってきた表参道の延長線上の通りです。

表参道の交差点は十字路なんです。青山通りも表参道通りも歩道も広い大きな通りなのに比べ、このみゆき通りは両側2車線プラス歩道という狭い通りなので、表参道の交差点はT字路のイメージがあります。でもこの狭いみゆき通りが青山では最初にファッショナブルとして注目された通りなんです。なかでもここ青山がファッショナブルとして知られるようになった切っ掛けがこのみゆき通りにあるフロムファーストでした。

ファッショナブルの先駆けともいえるフロムファーストがオープンしたのが1975年。以来、有名ブランドのお店が次々と出店してファッショナブルの先駆けになりました。

表参道の交差点から急に狭くなったみゆき通りに

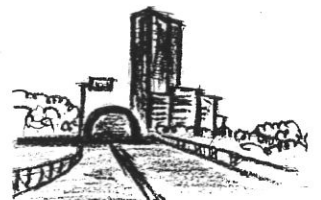
入ると両側に馴染みの店が並びます。コムテギャルソンのショップ辺りから下りになり一段下がったところが全面ガラス積み木のようなブラダ。ヨックモックを過ぎたあたりがフロムファースト。道向かいが青南小学校。

ここからがこのみゆき通りの面白いところですが、フロムファーストの角の信号から次の十字路の信号までは約50メートル。通りはいくぶん左にカーブしています。そのまま道なりに行けば青山墓地(陸橋)になっていて、下の通りが切り通しのような通称キラー通りの外苑西通り)です。右に行けば骨董通りにT字路でぶつかります。まっすぐ根津美術館の壁に沿って下って行けば、通りは細くなり、その先はさらに二つに分かれてもっと細い一方通行になって西麻布に抜けます。

みゆき通りは青山墓地を抜けるとトンネルで千代田線の乃木坂の横に出て赤坂に抜けますが、何年前か前までは青山墓地を過ぎたら行き止まりでした。どうしてこんなに変わったのにならうか？どうしてこんな計画があったのにならうか？と疑問に思っていました。

この疑問を解決する本に出会いました。田口道子さんという青山で生まれ育った方が書かれた『東京青山1940』という本です。戦前からの青山の様子が愛情深く描かれています。この本によると、戦前、天皇陛下が明治神宮にお参りして真つ直ぐ宮城に帰れるように作った。それでみゆき通りという名前がついたというわけがあったそうです。行幸の意味のみゆき通りは合点がいきますね。

そんな道路計画が太平洋戦争で中止になって変なところが道が途切れて行き止まりになっていったんでしょ？この話は信憑性があると思いません。今、地下鉄千代田線がこのみゆき通りの真下を通っていますが、この地下鉄工事と一緒にトンネル工事やって乃木坂に繋げたいんでしょ。詳しい経緯をご存知の方は是非教えてください。



耐光堅牢度 (たいこうけんろうど)

出では消える真っ白のカシミア

今回は堅牢度(けんろうど)の話です。服を製造したり販売するとき製造者、販売者として責任を持たなければならぬことに堅牢度があります。主な堅牢度は3種類。耐光堅牢度、染色堅牢度、摩擦堅牢度です。

堅牢度というとなんだか難しく聞こえますが、日光や紫外線による黄ばみや退色などの度合いが耐光堅牢度。洗濯などのときに色落ちしてしまう度合いが染色堅牢度、そして擦れなどに対する摩擦堅牢度で、これらの度合いを1級から5級までに等級別けて判別しています。

耐光堅牢度を測るには繊維を紫外線に連続して20時間当てて変色具合を図る方法が一般的です。色物の変色や退色はそんなに差は出にくいようですが、白はかなり差が出るので素人目にも差がはっきり判ります。

『白は黄ばみやすい』というのは皆さんもご存知のとおりですが、晒(さら)した白ほど変色しやすいのです。自然の白、いわゆる生成りとかオフホワイトと呼ばれる白はある程度堅牢度はありますが、晒すと極端に堅牢度は落ちます。人の肌为例えると日焼け止めをしたのが生成りで、晒しはすっぴんの状態ですぐに日に焼けてしまうのと同じです。

『時々、UTOの白のカシミアは黄色みがかったり、真っ白のカシミアがほしい』といわれることがあります。おっしゃるとおり真っ白ではありません。オフホワイトです。しかし世界中の白のカシミアといえはこのオフホワイトですが、たまたま綿のさらしたような真っ白、或いは漂白したり蛍光色をつけたような真っ白のカシミアを見られた人は印象が深いようです。

UTOでは通常あえてこの真っ白のカシミアでの製品は作っていません。どうしてもというご要望で欠点を説明した上で、糸を取り寄せてお作りしたこともありま



すが、一番の欠点が『真っ白のカシミアはすぐに黄ばんでしまう』。いわゆる耐光堅牢度が弱いんです。

光による退色や変色は自然現象である程度は仕方ないと思いますが、真っ白のカシミアの耐光堅牢度は3級ぎりぎりなんです。

高級なカシミア製品はかなり高価になってしまっています。だからこそ長く愛用してほしいと思いがら作っているんです。そんなカシミアが1、2年ぐらいで黄ばんでしまったらショックですし、信頼が損なわれてしまいます。

カシミアだけが耐光堅牢度が悪いわけではなく普通のウールでも同じです。

そんな真っ白のカシミアの糸を作っている紡績の人に、『耐光堅牢度の低い真っ白は問題が起きないの?』と聞いたことがあります。

『当社も積極的にこの真っ白を作っているわけではなく、どうしてもという依頼で作っているんです。日本でもヨーロッパでも紡績のプロの間ではこんな真っ白のカシミアは耐光堅牢度が弱いというのは常識ですから、基本的には世界中のカシミアの白といえオフホワイトなんです。しかし何年かの周期でデザイン先行のヨーロッパなどから真っ白のカシミアが入ってくる知識の無いデザイナーや堅牢度なんてお構いなしブランド

が真っ白のカシミアを出すメーカーが反応して少数なんです。真っ白のカシミアを要望されるんです。『耐光堅牢度が弱いので黄ばむ可能性がありますよ』という『退色に』と注意という、ケア・ラベルを付けて販売したりするんです。それで往々にしてクレームになることがあったり、がっかりしたりして、そのうちに自然消滅のように無くなるんです。この真っ白のカシミアは出では消える困ったカシミアなんです。

忙中暇話・ニット屋のたわごと

地球温暖化の証の蝶



10月に入ってやっと秋らしくなってきました。神代植物園では四季咲きのバラが華やかに咲き、野川公園ではキバナコスモスが満開で沢山のツマグロヒヨウモンが吸蜜にきていました。

ツマグロヒヨウモンはモンシロチョウなどよりずっと大きく、黄色地にヒヨウのような黒い点々がありとても目立ちます。飛び方はのんびりしていて、おたおたと飛んできては羽を半開きにして夢中で吸蜜しているのでよく観察できます。

小学校の2年生のとき夏休みの宿題で昆虫採集をやったのが切っ掛けで蝶に魅せられて以来30代まで蝶を追っかける昆虫少年(野郎?)で、現在は長い、お休み中です。この蝶が姿を現すのが夏から秋にかけての季節。九州の田舎ではよく百日草の花に飛来していました。

今から4、50年前のことを懐かしく思いながらも、『待てよ! ツマグロヒヨウモンは南の蝶だはず』と、家に帰って本棚から昔使っていた原色日本蝶類図鑑を引っ張り出します。昭和29年発行で昭和47年に増補改訂された古い図鑑です。

それによるとツマグロヒヨウモンの分布は南アジアから日本にかけて。日本の中でも九州から関西辺りまでとなっていました。『やっぱり!』です。ヒヨウモンチョウの類は一般に高原の草原帯にいる奴が多く九州の島原辺りにいるのはこのツマグロヒヨウモンくらいでしたからよく覚えていました。雄の羽根の模様は違っていて、メスは前羽の先が黒く、その内側の白い帯が鮮やかで昆虫界では珍しくオスよりメスのほうが派手な姿で、小学生の頃の本箱の中でヒヨウ柄のこのツマグロヒヨウモンがとつても目立っていました。

この蝶が東京で採集されたという事は50年前なら大発見です。きっと、新聞に『東京でツマグロヒヨウモン発見』などと載るぐらいのニュースです。台風などの後に南方の蝶が迷走して発見されることが時々ありますが、こんなに沢山飛んでいるということはここに住み着いているとしか考えられません。

ツマグロヒヨウモンの食草はスミレです。この頃は庭や街路にパンジーやビオラがよく植えられているのでそこで繁殖しているのです。年間に4、5回発生するので雨のほうから世を経ながら北上するんですけど、以前は東京辺りでは全く見れない蝶でした。幼虫で越冬するのですがこの頃の温暖化の影響で徐々に定着しているのでしょう。

このように自分の知識の範囲や経験で実感すると、『温暖化は深刻』と思います。可愛いツマグロヒヨウモンを見ながら身の回りで出来るエコを真剣に考えさせられます。

元旅行屋のお勤め イエローストーン・USA オールドフェイスフル イン

今回のホテルは、大自然のど真ん中のホテルです。今から約100年前の1904年に建てられた世界一大きなログハウスのホテルとして、アメリカ人の自然派の人達が憧れるホテルで、まさに『西部開拓時代のホテルを旅する』にぴったりのホテルです。

このホテルがあるのは、世界で最初に国立公園に指定されたアメリカの北西部にある、イエローストーン、ナショナルパークの中です。

約一時間おきに十メートルも熱湯を吹き上げるイエローストーンのハイライトと言わば大間欠泉、オールドフェイスフルの真ん前にあるホテルで、このホテルが広大なイエローストーンを中心といっても過言ではないでしょう。

イエローストーンがあるのはアメリカ北西部のワイオミング州、その州都がシャイアン。南のゲートタウンがジャクソン。こんな名前を聞いただけでも西部劇ファンには幌馬車や二挺拳銃のカウボーイが思い浮かんでしまう。アメリカ西部開拓の原動力が残る処です。

大自然の中で窓々と草を食むバイソンの群れや、落差百メートルを超えるイエローストーン滝。いずれもイエローストーンの有名なビューポイントですが、このホテル自体がそれにも決して引けを取らないイエローストーンの財産でしょう。自然に調和したオールドフェイスフルインの建物は、人工物でありながらも決して自然を損なうものではなく、美のセンスや知恵で共存する事は可能という事を教えてくれます。

木製の重い扉を押してロビーに入ると、オペラハウスの中を思わせる壮大な空間が迎えてくれます。四階まで吹き抜ける巨大な石組みのマンホールピラー。そのマンホールピラーが舞台で、ロビーがアリーナで、周りを一階から四階までボックスシートのテラスが囲んでいるようです。その空間がすべて木組みです。巨大な米松で作られた空間は天然の木材から作られたとは思ってもつかないほど大きな空間です。

四階のテラスから強大なマンホールピラーの人達を見下ろしながら、自分が馬か馬車にでも乗ってきたような気分が、あまりの居心地のよさに、十枚近い絵葉書を書いた覚えがあります。

アメリカの西部開拓時代のフロンティアスピリッツを今に伝える貴重な遺産ホテルです。

